

ニは角笛をシルヴァに渡して「私が死ぬのをお望みの時はこの角笛を吹いて下さい。すぐ死にます」と誓う。第4幕終了前、皇帝の恩赦を受けエルナーニ、エルヴィーラの結婚式の最中にシルヴァはエルヴィーラを取られた復讐に角笛を吹く・・・
バリトン、パッソ・プロフォンド（やや深みのあるバリトン）

オペラ「エルナーニ」について・・

ヴェルディ第5作目「エルナーニ」になってアリア＝メロディ・ラインが徐々にではあるが前四作品より流麗になり、聞きやすくなってきた。主役4人にほぼ同じようにアリアを与えているので主役4人の歌唱力がこのオペラの巧拙を左右する。そして、その歌唱力がドラマチック音楽劇を生み出すのである。公演に際しは、この主役4人揃えるのは大変な事であるため、公演回数が少ないのも頷ける。中でも歴史上実在の人物ドン・カルロ＝カルロス1世から神聖ローマ帝国皇帝＝カルロス5世になるこの役は所謂ヴェルディ・バリトンの声質、歌唱力が要求される。この教材ではレナート・ブルゾン(Renato Bruson)が歌っている。素晴らしいヴェルディ・バリトンである。幕を追うごとに完璧に近づく。エルナーニ役のプラシド・ドミンゴの声がかすむ程の場面もある。

レナート・ブルゾンの横顔をみてみよう。

レナート・ブルゾン(Renato Bruson 1936/01/13～)・・・
彼自身が語っている。

私はパドヴァの片田舎、グランツェ(地図で調べたがなかった)というところで生まれました。百姓の家庭ですが、いわゆる小作人農家であり、家族は4人、父、母、姉と私で極貧の農家でした。

8歳の時、母は破傷風で死亡。姉は親戚に引き取られ、父は再婚し、父と一緒に再婚先へ引っ越しました。

14歳の時、地元の司祭から教会でオルガンを習いました。この司祭はオペラ・ファンで、ある晩、司祭はヴェルディ没後50年で、今晚ラジオで「ナブッコ」が放送されるので来なさいということで、わたしは喜んで参りました。これがオペラとの初めての出会いで、私の生涯が決定されたのです。

その後1952年ヴェローナ野外劇場で「ジョコンダ」(マリア・カラスの)を観、強烈な印象を受けました。歌手になりたい。と思うようになりパドヴァの音楽学校の試験を受けました。結果、私の声に審査員全員が将来性のある声質と認められましたが、兵役の通知が来ました。入隊地はトリエステでした。除隊後

1961年スポレータのコンクールに応募、優勝し劇場で歌う権利を獲得しまし

